

名作再読、拾い読み (25)

『キリマンジャロの雪』 ("The snows of Kilimanjaro") 小澤 文彦

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Miller Hemingway, 1899-1961) は20世紀アメリカの代表的な作家です。シカゴ郊外のオーク・パークで、釣りと狩猟を趣味とする医師である父と、音楽・絵画などの芸術的才能の持ち主である母との間に生まれました。高校卒業後、新聞記者になりますが、第一次世界大戦へ参戦を志願し、赤十字要員としてヨーロッパへ行きます。イタリア戦線で重傷を負って帰国し、戦傷による不眠症に悩まされながら創作を始め、やがてトロントに出て再び新聞記者になります。1921年、特派員としてパリに行き、多くの作家達と知り合いになり、文章表現に力を注いで所謂ハードボイルド文体を作り上げます。『日はまた昇る』(1926)で一躍世に認められ、『武器よさらば』(1929)で作家の地位を確立しました。『誰がために鐘は鳴る』(1940)の後、『老人と海』(1952)でピューリッツァー賞を受け、1954年にはノーベル文学賞を受けました。晩年は健康を損ねて鬱病になり、何度か自殺未遂を図った末に1961年、愛用の猟銃で自殺を遂げます。61歳でした。

今回は彼の短編集の中から『キリマンジャロの雪』(1936)を紹介します。冒頭の記事でタンザニアにあるキリマンジャロは、高さ標高5,895mの雪に覆われた山で、アフリカ最高峰だということ、その西側の頂は、マサイ語で「神の家」と呼ばれていることが説明され、次のような言葉で締め括られています。

"Close to the western summit there is the dried and frozen carcass of a leopard. No one has explained what the leopard was seeking at that altitude."

(西側の頂に近く、ひからびて凍りついた一頭の豹の屍が横たわっている。このような高いところで、豹がなにを探していたのか、だれ一人説明した者はない。)[福田陸太郎訳]

キリマンジャロの麓にサファリに来ていた作家ハリーは、大カモシカの写真を撮ろうとして右脚の膝にトゲが刺さり、その掻き傷が悪化して壊疽になりました。壊疽から出る臭い、周囲に集まってくる鳥やハイエナの姿に、自分の死が迫っていることを悟ったハリーは、制止するヘレンの忠告を振り切って自棄酒を始めます。ほろ酔い心地のままにヨーロッパ各地の戦場で戦ったこと、様々な女性達と愛し合い、そして喧嘩別れしたこと、パリの街中や田舎の風景な

どを懐かしく思い出し、自分がそれを文章に書き残さなかったことを後悔します。ヘレンが救援を求めた飛行機が漸くやって来て飛行機で搬送される途中、キリマンジャロの雪に覆われた頂が目の前に見えてきます。

"... and there, ahead, all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. And then he knew that there was where he was going."

(…その前方には、視野いっぱい、全世界のように幅の広い、巨大な、高い、陽光を浴びて信じられないくらい純白に輝いているキリマンジャロの四角い頂があった。そのとき彼は、これこそ自分が行こうとしているところなのだと知った。)[福田陸太郎訳]

ハイエナの鳴き声とヘレンの幻覚で死が暗示された結末となっていますが、雪に覆われたキリマンジャロの神々しさと謎めいた豹の屍が印象的な作品です。

『武器よさらば』を発表した後の7年間、彼はまとまった作品を発表することはありませんでした。この時期は、未曾有の大恐慌が起こって世の中が混乱し、ヘミングウェイにとっては、次から次へと不幸に見舞われた苦しい時期でした。1928年に父親が自殺、1930年には本人が交通事故で重傷を負い、1934年にはアフリカ狩猟旅行中にアメーバ赤痢に罹るといった、間近に死を体験した時期です。この後、発表された『キリマンジャロの雪』では、献身的に看病する妻の優しさを迷惑がるハリーの屈折した心理、過去を振り返ってやり残したことが多いことに焦りを感じる気持ちなど、それまでの彼の作品に多い野性的行動的な主人公達とは異なっており、死を予感して揺れ動く心の描写にヘミングウェイの年輪が感じとれます。

参考文献

1. Ernest Hemingway "The snows of Kilimanjaro and other stories" (C. Scribner, c1961)
2. ヘミングウェイ著 福田陸太郎訳『キリマンジャロの雪』(ヘミングウェイ著『全短篇集』[II]より)(三笠書房、1970)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)